

阪

神・淡路大震災の震源の一部だった野島断層に近く、淡路島北西部に位置する北淡町（現淡路市）。特に港町の富島地区は、約8割の建物が全半壊するなど被害は甚大を極めた。

富島は「なま船」と呼ばれた運搬船の寄港地として栄えた。この船は、九州で仕入れた鮮魚を瀬戸内海経由で大阪や神戸に運び、荷を降ろしたあと陶器や衣料品を積んで九州へ向かった。富島には多くの船員が流れ込み、船元が所有する長屋で生活した。町には旅館が建ち並び、芸者がそぞろ歩く港町として活況を呈した。

しかし、陸上輸送の発展につれてなま船は衰退し、船員たちは生活のために漁師に転身した。やがて漁師の仕事が軌道に乗ると、長屋を出て家を建てようとする者が増えていく。富島の土地はほとんどが船元の所有だったため、船元には土地を譲り受けようとする漁師が殺到した。昭和40年代には坪当たり100万円という値がつい

復興復興に寄り添う住民の思い

兵庫・淡路富島 震災復興事業

(1995年・平成7年)



新田匡史

につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata

たこともあったという。

◆復興計画に住民が猛反対

漁師の多くが港近くに家を求めたため、富島には狭小住宅が密集した。広くても100㎡、50㎡未満の家も少なくない。家と家の間には、自転車と歩行者がすれ違うのも困難な幅1mの狭い道しかない。その道は、漁師が漁網を引くのに使ったことから網道と呼ばれる。しかし、この密集した狭小家屋と細い網道が、震災時の避難と救助活動の妨げとなってしまった。地震で倒壊した家が網道を塞いだ。住民の暮らしの中心で地区を縦断する幅3〜4mの中道も、倒壊家屋で通行できなくなった。住民の避難は困難を極め、倒壊した家屋に残された住民を助けようにも、救助に向かう道がなかった。

そのため富島では、北淡町全体の3分の2を占める犠牲者が出た。震災後、島最大の被災地富島の復興への動きは早かった。震災前に都市計画区域が認可されたこと

もあり、21日後にはその計画区域の指定が告示された。だが、行政の区画整理案に住民が猛反対する。

「住宅密集と道路を何とかしなければならぬのはわかるが、上から下りてきた計画は住民の生活をまったく考えていない。住民の意見も何ひとつ聞いてくれない。机の上で勝手に決めた案だ」

区画整理の要諦は道路の拡幅である。そのためには土地を減歩する必要があるが、住民は土地の提供を拒んだ。当時の住民の声を震災直後から復興に携わる北淡町職員蜂谷一郎氏に聞いた。

「役場の人間は、やっと手に入れたおれたちの土地を騙し取ろうとする血も涙もないやつらだ。信じてはいけなと言われましたね」

反対の理由は、次の2点に集約された。1点は北淡町職員に区画整理事業の経験がなかったことだ。何も知らない住民に未経験の役人が説明しても、事業の真意は伝わらない。さらに決定的な点は、区画整理の計画が個々の諸事

情を考慮せずに決められたことだ。計画通りに進むと、住民が地域のコミュニティの核として信仰し続けてきた神社や祠が潰され、肩を寄せて支え合ってきた隣近所のつながりが崩壊してしまう。

◆まちに合った計画に変更

区画整理事業が遅れるなか、北淡町は99年度から経験豊富な住宅・都市整備公団（現UR）に事

住民の声を大事にその土地に適した復興が行われた



業を委託する。富島に赴いた当時のUR担当者はこう語る。

「家の門には反対のビラが貼られていて、至るところに反対ののぼりが立てられていたんです」

不信そうな視線を送り、聞く耳を持たない住民。UR担当者は強烈な逆風を感じ取ったという。そこで、UR担当者の多くは住民票を北淡町に移し、住民の立場に立っていることを必死に訴えた。

さらに、UR担当者や町の職員が2人1組で各戸を訪ね歩いて話を聞くと、自分たちの土地を取られるという減歩の言葉だけが独り歩きをしていることに気づかされたという。住民が区画整理事業についてほとんど理解していなかったため、住民の気持ちになって最初から丁寧に説明した。

1年半かけた説得で、住民との信頼関係が築かれていく。住民は徐々に心を開き、少しずつ要望を語り始めた。それを踏まえ、URと町は既に県に認可された事業計画の変更に着手する。

「変更の柱は富島の風景をどのようにに継承するか、それに住民が培ってきたコミュニティをいかに継承するか。この点に細心の注意を払いました」（UR担当者の話）

つまり、富島に合った区画整理にとことんこだわったのだ。

神社や祠はほとんど動かすことなく残した。そのためには道路は直線ではなく曲がついていてもいいと考えた。住民の暮らしの中心だった中道も、道路幅は広くしたが道筋はほとんど変えなかった。地域のつながりを分断しないよう区割りも見直した。そのため、道幅も6mにこだわらなくなった。特に網道は4mの図面を引くなど柔軟な対応をした。度重なる変更を繰り返して、ようやく最終案に住民が理解を示した。工事が進むにつれ、住民との意見交換も進む。ますます工事は加速し、09年度をもってすべての事業が完了した。

震災から18年目を迎えた今、幅が広がり歩道が整備された道路を歩く住民はこう話す。

「安心して道を歩けるようになってほっとしています」

神社や祠のそばには公園が作られ、地域のコミュニティは変わらずつづいている。隣近所のつながりも震災前と変わらない。さらにも事業で、思わぬ副産物が生まれたと多くの住民が口を揃える。

「子どもが、孫を連れて帰ってくるようになったんですよ」

富島は、産業がないため過疎化と高齢化が進む。富島を出た若者は、夏休みや正月でも寄りつかない。原因は下水道が完備して車が入れなかったこと。街が整備されてからは、不便が解消されて頻りに帰ってくるという。URの担当者しみじみと語る。

「住民のみなさんの喜ぶ姿を見るのができて、これほど嬉しいことはないですね」

街に、ルネッサンス



【企画制作】新潮社